レポート

世界の「ムナカタ」と富山の縁

調査研究係　井黒愛子

序文

棟方志功は1903年・明治36年9月5日、青森県青森市で刀鍛冶職人である棟方幸吉と、さだの三男として生まれる、極度の近視となる。

友人との間で、私は絵描きになりたいと語っている。

1924年・大正13年、東京へ上京する。

1945年・昭和20年、第二次世界大戦により、戦火を離れ東京から現・富山県南砺市福光に疎開する。今回、棟方志功の初孫で一緒に暮らしていた棟方志功研究家の石井頼子氏の書籍を読み、家族ならでは棟方の素顔や本音について知ることが出来、多くの発見があった。

油絵との出会い

小学校時代、凧絵とネブタ絵に夢中になる。紙がなければ地面に指で絵を描いた。働き出してからも写生に明け暮れていた。18才の時、雑誌「白樺」に掲載されたゴッホの「向日葵」を見て「ゴッホになる」と言った話は有名だがゴッホが人の名前とは知らず、油絵描きになりたい思いを「我はゴッホになる！」と表現したのだと棟方は説明している。

それから油絵に夢中になり、風景や動植物を描きに描いた。

21才で故郷・青森から絵の修行の為に上京、「帝展」を目指して挑むが落選が続く。

23才、川上澄生の版画「初夏の風」を国画創作協会で見て感動する。版画は作り始めて間もない昭和3年、創作版画協会展や春陽会に入選する。

25才で第9回帝展に故郷の風景を描いた「雑園」30号の油絵が初入選する。上京して4年、5回目で入選を果たす。

油絵か版画か

この頃、公募展の入選率は版画の圧勝で揺らぐ思いを持つ。色彩豊かな油絵の魅力は断ち難いが自分は近視の弱視で遠近感もつかめない。

西洋伝来の遠近法を基本とする油絵が向いているとは言いにくい。版画は平面で表現するもので遠近法にこだわる必要もない。何より日本で生まれ切るモノである。あのゴッホでさえ浮世絵に憧れたではないか。日本人が世界に誇れるもの、それは版画だ！　と言う論理の展開である。昭和7年の国画会に出品した「亀田・長谷川邸の裏庭」という作品が国画会奨学賞を得、同時にボストン美術館の購入作品となったことを機に「これから版画で生きる」決心を固めた。

民藝と棟方

民藝運動の提唱者、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司等に見出される。絵の師匠を持たなかった棟方は初めて精神的な師匠を得て、制作に大きな弾みがつくことになる。

柳の唱える民藝美論の根幹には「自分が仕事をするのではなく、自分を超えた何か大きな力が仕事を成してくれるのだ」自分が、自分が、という「我」で作ったものにその美はない。「我」を超えたところに美が宿るのだ、という考えである。

「他力の美」というものが存在するのだという考えで、版画というものも「他力」の在り方から出来ているものではないかと棟方は考えた。又、民藝運動を通じて得た人脈がその後の棟方を支えていくことになる。

富山県南砺市福光への疎開

昭和20年4月棟方志功一家6人が福光疎開。河井寛次郎を通して出会った、真宗大谷派寺院光徳寺住職「高坂貫昭」氏の招きで度々、

福光に滞在していた。真宗王国富山の中でも特に信仰の篤い地域であり寺と人とのつながりも深い。又、この地の自然と土地柄にもひかれた。光徳寺を通じて知己を得た人々からの呼びかけもあり疎開先とした。6年8ヶ月の疎開生活は、その後の作家人生に大きな影響を与えた。

質量共に豊かな作品を生み続け、数々の代表作を制作した。

疎開中の棟方を支援した人々の中でも、当事、福光町立図書館司書の石崎俊彦は、棟方と深い友情で結ばれ又、よき理解者でもあり、版画の刷りを任せられた。

戦後、板木が手に入らず、不揃いな小さい端材を活かす方法として考え付いたのが「板画本」の制作である。「手摺り手彩色手綴じ」の版画本が続々と作られた。これらの制作には手先が器用で実直な石崎がいて多数の刷りが叶ったのである。

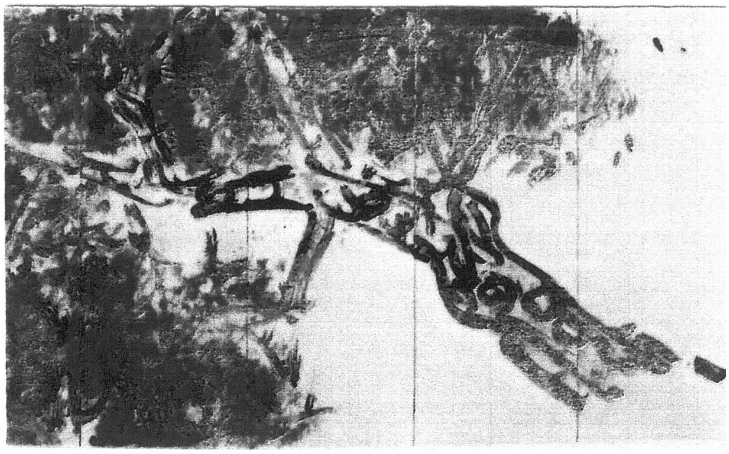
福光時代の作品

棟方は筆で描く絵を「倭画（やまとが）」と呼んだ。塗るのではなく「筆を本当に使って描くこと」を信念としたのが棟方の「倭画」である。

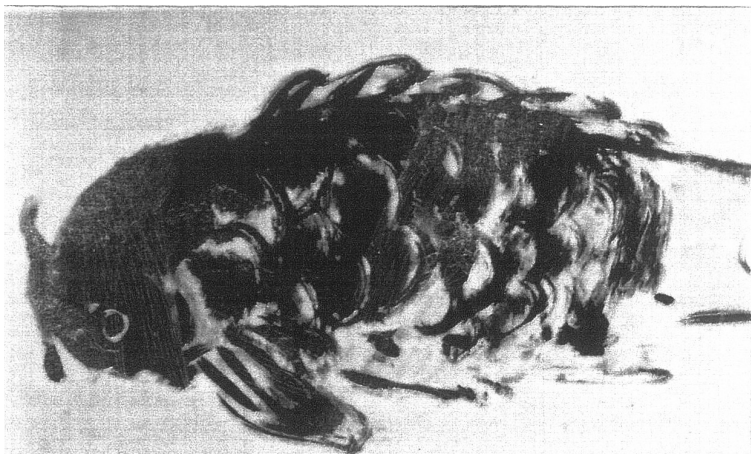
板木にも道具にも窮した福光時代は棟方に筆の仕事の面白さを教え育てた時期でもある。

作品の解説

所属名　**1. 棟方志功「松柏図」倭画**
1946年・昭和21年
南砺市立福光美術館　蔵



所属名　**2. 棟方志功「大鯉の図」倭画**
1948年・昭和23年
南砺市立福光美術館・分館　蔵



福光時代の象徴とも言える鯉の図は数多く残っている。

所属名　**3．棟方志功「四天雄飛の図」倭画**
1950年・昭和25年　南砺市立福光美術館 蔵

流れるような美しい描線で描かれた天女たちの「雄飛」の姿。福光中学校体育館の新築記念に寄贈、長らく生徒たちの姿を見守っていたが後年、福光を訪れた中曽根康弘氏（棟方志功と親交が深かった）が「バスケットボールが当たるような場所に棟方の作品を置くなど、もっての外、もっと作品を大切に扱って欲しい」と苦言を呈し、校長室に移されその後、美術館に収められる事になった。

所属名　**4．棟方志功「立像裸婦達」油画**
1950年・昭和25年
南砺市立福光美術館 蔵

所属名　**5．棟方志功「裸婦坐像」油画**
1947年・昭和22年
南砺市立福光美術館 蔵

油絵描きを志した棟方が版画を生涯の仕事として決めてからは「油絵は愉しみ」と割り切り、年に一、二度のペースで油絵を描いていた。風景が多いが裸婦は比較的に珍しい。

所属名　**6．棟方志功「鯉雨画斎、厠観音」**
年号不詳
南砺市立福光美術館・分館 蔵

どこに住んでも厠には沢山の菩薩や仏様を描いた。

多くの「厠観音」が家の建て替えと共に消えた中で、唯一残る貴重な作品。鯉雨画斎は棟方のアトリエ。「鯉雨」は富山時代に好んだ号。

棟方志功の本当にやりたかったこと

石井頼子氏の書籍の中で「日展に版画部を作るというのが棟方のただ一つの、本当の目的であった」と書かれている。

油絵に匹敵、というより油絵や日本画よりも、見識がある版画を。その一心だった。

柳宗悦からの手紙で、なんで日展なんかに出すんだ。そういうことに巻き込まれないで、もっと自由にやったらいいんじゃないか、と言われても、毎年日展に挑戦し続ける。

昭和35年日版会設立（現・日本版画会、日展に版画部門を設立するため）
昭和45年、67才、文化勲章授与される。
昭和50年、72才、日展常任理事となる。
その年の9月逝去。

棟方の強い気持ちは受け入れられず、いまだに版画部は出来ない。

石井氏は、毎年出品していた一点ずつの作品がすごくいい。と書かれている。

疎開の富山県南砺市福光

棟方志功の疎開先、富山県南砺市福光で多くの民藝関係者や芸術家が福光を訪ね、土地の人達の心の中に大きな文化の種をまいた。

福光の人に「志功さん」と呼ばれて愛され続け、棟方の住居、アトリエは当時のままに保全、守られている。

棟方志功も豊かな自然と人々との交流を懐かしみ「第二の故郷」と讃えている。

五箇山にほど近い山間の静かな場所にある富山県南砺市立福光美術館、童子のような仏様のような「まあるい笑顔の志功さん」が迎えてくれるのである。

◎引用・参考文献・協力者

・棟方志功氏の親族「著作権保持者」
棟方志功氏の孫・　棟方　　良 氏

・富山県南砺市立福光美術館「図版掲載承諾書」
館長　片岸　昭二 氏
（富山県南砺市法林寺2010）

・参考文献として
「信仰と美の出会い、棟方志功の福光時代」
棟方志功の初孫　石井　頼子 氏
発売元　株式会社　青幻舎